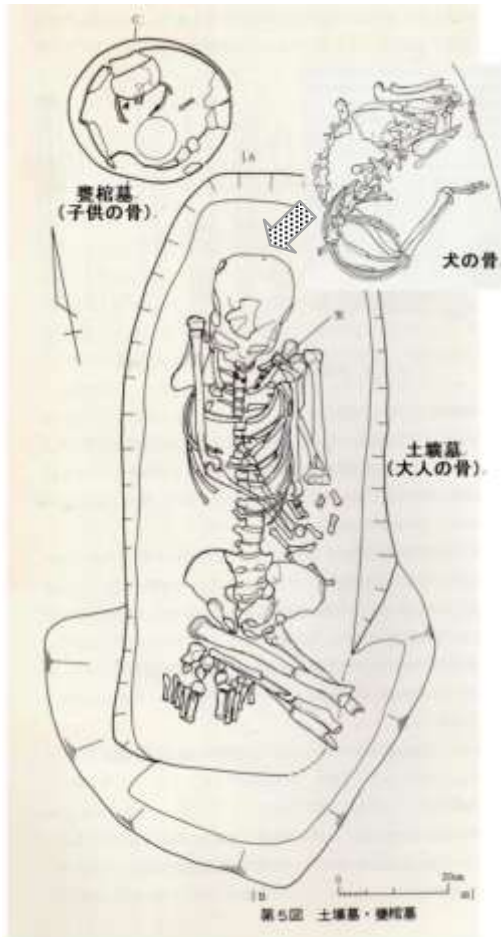


前浜貝塚の埋葬骨を読み解く

— 再鑑定から見えてきたこと —



『前浜貝塚』(発行:本吉町教育委員会 1979).

1978年に本吉町教育委員会(当時)がこの貝塚の発掘調査を行い、埋葬された人骨を発見しました。その調査報告は『前浜貝塚』(本吉町教育委員会 1979)にまとめられています。この報告書によると、埋葬された人骨は女性で、年齢は15~17歳くらい。その土壙墓に接して土器が埋められており、その中には生まれて間もない赤ちゃんの骨が入っていました。そしてさらに奇妙なことに、この女性の頭の上に一匹のイヌが乗せられていたのです。

この調査で発掘した前浜貝塚の人骨や遺物は現在も東北歴史博物館に保管されています。その人骨と遺物を2012年に東北歴史博物館の相原淳一さん(学芸員)が中心となって科学的な研究を行いました。その結果、女性人骨が経産婦ではなく、また胎児の人骨と埋葬された年代も異なることが明らかになったのです。

では、これらの人骨が何者であり、どのような関係であったのか。この疑問を解くには、さらなる調査が必要になります。貝塚の調査の範囲を広げることで新たな発見や知見を得られるはずです。

今回、前浜貝塚埋葬人骨の再鑑定を行った相原淳一さんをお迎えして、前浜貝塚の埋葬された人骨と犬骨から何が読み解けるのかをお話しいたします。

日時 2021年10月17日(日)

午前10時~12時

場所 前浜マリンセンター

定員 50名

主催 前浜貝塚研究会

協賛 前浜地域振興会

■講師紹介

相原淳一さん(東北歴史博物館学芸員)

1957年生まれ。宮城県白石市出身。東北大学文学部考古学専攻。宮城県教育庁文化財保護課では、主として縄文時代の遺跡の発掘調査を行った。2008年からは東北歴史博物館で学芸員として勤務している。東日本大震災以降は東北地方各地の津波堆積物の調査を行い、復興調査では気仙沼市波路上杉ノ下貝塚の発掘調査に従事。本年6月には10年間の成果「再考 貞観津波 一考古学から「津波堆積物」を考える一」を『考古学研究』第68巻第1号にまとめ、第30回 International Tsunami Symposium で発表した。



気仙沼市前浜貝塚の埋葬人骨

東北歴史博物館 相原 淳一

要 旨

前浜貝塚は宮城県気仙沼市本吉町に所在する縄文時代後期から晩期に属する貝塚です。1980年5月1日に町史跡に指定され、現在、市指定となっています。遺跡は南三陸海岸の標高9～26mの低い台地上に立地し、東日本大震災では、標高20m付近まで津波が到達し、遺跡の約半分が浸水しました。

1978年10月13日に、本吉町教育委員会の文化財パトロール事業として試掘調査が行われ、表土下約10cmで貝層が現れ、人骨が埋葬されていることが確認され、ただちに埋め戻されました。試掘調査の事後処理を兼ねた最小限度の緊急調査が、本吉町教育委員会を調査主体者、宮城県教育庁文化財保護課を調査担当者として、1978年11月29日から12月2日までの4日間にわたって実施されました。調査面積は1.2×2.0mの2.4㎡です。調査の結果、土壌墓から15～17歳の青年女性屈葬人骨1体、人骨頭蓋上位からオス成犬1体、土壌墓に近接した甕棺墓からは月齢10ヶ月半ばの胎児骨1体が検出され、土壌墓・甕棺墓内の埋土中とみられる土器片から、縄文時代晩期中葉と位置づけられました。発掘調査報告書は1979年に宮城県本吉町教育委員会から発行されています。

調査の性格上、事実関係にあいまいさを残し、種々の解釈や俗説を生み出すことになりました。2010年に東北歴史博物館では事実関係の基礎調査、2012年4月から3月までは自然科学の分析を取り入れた学際的な調査研究を行いました。その結果、胎児骨の入った甕棺墓は埋設土器付着炭化物の14C年代測定および土器の型式学的検討から縄文時代後期中葉、女性人骨と犬骨は後期後葉から晩期初頭に属することが明らかとなりました。女性人骨頭蓋の前頭・頭頂部における骨破損は外板剥離を伴うものであり、犬埋葬時に外力が加わったために生じた可能性が強いことが示され、また、骨端部癒合の程度から13～18歳女性、寛骨耳状面前下部の骨形態から妊娠・出産痕はないことが明らかとなりました。食性分析では、人骨は陸獣動物の食性に近く、犬骨は海生魚類に近い結果が得られ、北方民族の犬の飼育に魚のアラが用いられる例に近似していることが指摘されています。